地誌研年報 6 号，1997年 3 月
ANREG 6, March 1997

比較動態地誌学研究におけるパラダイムとエートス フィールドワーク論管見

米 田　　巖*

Dynamic Approach toward Self-Innovative Processes of Paradigm Sift in Regional Geography: Rejuvenating Geographer's Diciplines and Etos

Iwao　MAIDA*

目　　次

I．パラダイムの革新とフィールド
II．パラダイムとしてのフィールドワーク論
III．比較動態地誌のシナリオをかくために
IV．ベーコンの 4 つのイドラ－蟻と蜘蛛と蜂
V．プロトコル命題

I．パラダイムの革新とフィールド

一度開墾された耕地が，再び元の荒野や原野に戻った土地を指して，還元地ということがある。地理学の固有の領域で開発された手法や技法，あるいは，十分な検証過程を経ていない一連の仮説命題群，さらには理論といわれるものについて吟味して見ると，演繹的方法によるものはひとまず措くとして，フィールドから帰納的に導出されたものは意外と少ない。輸入もの，その時々の旬のもので，耳目をそば立てた鳴もの，他学会からの借り物等を除いた純生産を学会の財産在庫リストとして整理してみた場合，果たしてどれほどの成果をあげ得たのか，国産の純血種はどれと，どれなのか，学徒の一人として内心忸怩たるものを感じる。研究対象は拡散し，手法は借り物となり，しかもほとんと地理学固有の意味でのフィールドワークに基づいたモノグラフが次第に少なくなりつつある傾向は否めない。

もとより，演繹と帰納は，もとより方法論上，一つの胞胚から芽生えた双生の対をなし，

＊広島大学総合科学部　; Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

相互に相補的関係にあり，かつ密接不可分ある。どちらが，先後／優劣関係にたつというのではない。これを双極に対置させ，一方を実証，他方を理論化指向として二分してしまうのはたやすいが，弊害も大きい。筆者ははこれまでの現地調査体験から経験的にみて，時間スケール，空間スケールともメソ・スケールで共同研究を行う場合[1]，仮説探索／検証型[2]の照準枠を設定し，それに基づいた定点観測と定時観測を，ある程度長期にわたり継続して行うにはパネル調査法が適当であることを提示した[3]。

研究計画は，いくつかの指標により，地誌学的／系統地理学的，個人研究／共同研究[4]，内国／外国研究[5]，短期／長期研究[6]などに区分できるが，問題は，一定の研究計画に基いた研究成果が，1）いかにフィールドから発想され，2）一定の仮説に基づいた標本地区設定，標本相互の比較の基準とそれによる作業実施計画，各種調査票／フェースシート記入作成と手順を踏みながら，正確なデータが収集・検収されているかどうか，そして，3）解釈の結果が，フィールドで検証されているかが決定的に重要になってくる。帰納，演繹それらのいずれの方法でもフィールドに始まり，フィールドに回帰していくか，否か，そして，4）それが他の研究モノグラフと比較対照され，大きな研究展望のもとに方向づけられているか，否か，最後に，研究成果が，5）学会の共有の知見として財産リストに掲載し，これを継承するに値するだけのパラダイム革新か，否かに関わってくる。5）については，評価者，評価基準およびその幅の実勢などの目安のほか，時間的なろ過期間が，玉石のグラデーションを知るために必要となる。一応の見通しとしては短期(annual～bi-yearly)，中期(decade)，長期(centennial)の3つの時間スケールの単位が考えられる。時間スケールによっては評価が逆転し，見直しを求められることもあるからである。

1）から4）段階に至る研究計画全体が理論負荷がつよいものであれ，仮説探索／検証型[7]のそれであれ，真性の地理学研究者に求められているのは，フィールドに始まりフィールドにおいて検証し，フィールドに生起する地域現象を合理的に説明する普遍モデルを明示的に提起することにある。特に5）との関連においては，個々のモノグラフが，部分理論や説明仮説の域にある知見を統合し，いずれは，いくつかのグランドセオリーをうみおとしてくれるだけの内包的かつ外延的なポテンシアルを有するかどうかは，地理学会を内包する狭義での学術研究共同体のいわば制度的審理と，それにもとづく人為的な取捨選択の過程と，残るべくして残る，という意味での自然的な淘汰過程によるところが大きい。考えられるケースとしては，1）制度的審理の結果残り，中・長期的には自然に淘汰される場合，あるいは，2）その逆のケース，そして，3）そのいずれの過程においても，結果として評価されないケースがあるが，4）短・中期的に，学会で大方の支持を得たものが地理学史にその名をとどめるケースが蓋然性としては最も高いといえるであろう[8]。

いずれの場合おいても，研究の専門家集団が，狭義での講座制[9]を含む階層的な研究教育組織によって，制度的にも財政的にも調弁され，それぞれ固有の学統が培われてきている以上，それにまつわる社会通念上の威信構造の在り方と分離して考えることはできない。しかし，個々の研究の成果が真正な意味でのグランドセオリーをどの程度指向し，その距離をちじめたか，それへの適合度を，つねに，力の及ぶ限り検証することに成功したかが評価基準として重要になってくる。そのような意味での地理学研究者としての自己規律と，絶えざる自己革新の力が今日ほど強く求められている時はない。地誌学固有の伝統を正当に継承しつつ，これを超えていくこと，換言すれば，既存のパラダイムの改良や解釈の修正にとどまらない，真の意味でのパラダイムの革新は，連続した峰峰を腑観してはじめておぼえる，あの戦慄にも似た知的創造の興奮と想像力われわれに喚起してくれる。

一度開墾された土地が自然の力によって覆えされ，もとの本来のウイルダネスに還元されるように，耕圃も，その管理の知恵である農法も，もとを正せば，その自然を手なずけ，耕地生態系をコントロールするための制御系として編み出れた農民による英知の結晶の体系といってよい。耕圃も農法も，農民が自然から学びとった第二の自然である。換言するならば，自然から，耕圃と農法が生まれたのであって，その逆ではない。マクロ・メソスケールでは，その耕圃をふくむ地域全体の気候，土壌，植生の影響を受けていると同時に，その耕圃を直接規定する環境因子の刻印をもうけている。耕圃と農法はいわば，環境条件においてユニヴァーサル・レジームが，ローカル・レジームの中にあり，しかも前者が後者を入れ子のように包摂する多重構造をとる。

このようなアナロジーで表現するならば，パラダイムはフィールドを母として生みだされたのであって，決してその逆ではない。そのような意味において両者の関係は，一方的であり，非可逆的であるといえよう。このような視点に立脚するならば，地理学研究者としての資格証明，彼の提出した研究モノグラフの品質証明はおのずから明らかであろう。地理学研究者は生まれと出自[10]よって知られるというより[11]は別の，もう一つの明快な基準，すなわち，真性なるフィールドワーカーにしてパラダイム・イノヴェーター，かくあらしめる原動力としてのエートスと自己規律をたえず指向するという点において際立っている。

II．パラダイムとしてのフィールドワーク論

これまでのフィールドワーク論はその技法，手法的なものから，それらを支える思想に至るまで，個々の研究者の秘中の秘，師から直接，間接に伝授される門外不出の直伝とみ

え，本人には手馴れた駒のように自在であっても，その流派の門外にあっては，臨地観察か，講義の合間の出来分別か，実に不分明窮まりない。出稽古をお願いしたいところであるが，フィールドワークの本格を学びたいと思えば，雛段には，妙手に達者ぞろいながら，学ぶ側から見れば，まことに不如意なものである。確かに数こそ少ないものの，類書も，このところ少なからず出版されるようになったことは喜ばしい限りであるが，痒いところまで手が届かない。地理学や，地誌学がデシプリンとして教授され，その重要性が折にに触れて，強調される割合には，伝授方があまりにもなおざりにされれているのではあるまいか。

由緒正しい筋目，筋目には的伝と称し，正統から正統を伝える直伝のならわしがある。ときに，直伝が継承の方法として，大方のところ一子相伝を基本とし，漏らさず，絶やさず，これを秘かに伝えることを旨とするのは，庶流，別家筋に本家筋を潜称されては，本末転倒いう事態を惹起するおそれがあるのみならず，はたまた，本家筋の名聞利養を名実ともども毀損される怖れがあったからにほかならない。現代の目から見て採るところがあるとするならば，道ならぬ破格を斥け，本格につくということであろうか。

しかし，秘伝，直伝の中味を公平に開陳してこそ有難みもいや増し，教授内容も，いくつかの指標をもとに手順を踏んで基準化，標準化してこそ，大方の受容するところとなる。名人芸のひそみに倣い，そこに漂う風格を作品から感じ取るだけでは，作品を芸術たらしめている手のうちはわからない。

法学部においてはリーガルマイド，経済学徒は経国斉民の理念を実現するためひたすら，入るを計り，出ずるを制する技術（マクロ／ミクロ理論政策，歴史）を習得する。ウイリアム・ペティー以来の伝統にしたがってい表現すれば，いわゆる政治算術 (political arithmetick)[12]ということになる。

翻って，わが地理学徒場合は，地図学，測量実習，写真測量，地理学実験，巡検実習を，いわばプラキシスとして履修し，その門を一応は通過するものの，それらの調査技術。技法をマスターして現地のぞむ時，地理調査法として生かされているかどうか，については，はなはだ疑問である。まず，教授される内容が教授によって相当異なり，しかもフィールドと即応していない場合が少なくない。地理学固有の実学にくわえて，地誌的記載を行うことを意識した調査計画，調査・標本区の選定，標本計画，調査票作成，レコネイサンスを含む本調査，再訪調査等の計画と実施についての教程を一体として教育していくフィールドワーク論は現在のところ，デ＝ファクト・スタンダードとしても確立されていない。第三者が追検し，反証可能かたちで段階的に推論できるような綿密に設計された，いわば，開かれた思考回路に沿って調査研究を展開できるようにすること，このようなプロセスを

基準化し，早急に規格を明示して，これをパラダイムとして共有できるようルーテイン化していくことが早急に要請される。

レデイーメードの地理情報が，データベース丸ごと瞬時にうちにダウンロードできる時代になると，学生も教師も本来の真性の意味での地理学の主戦場 (battle field!) を離れ，あるいは忘れ，究極的には誰かから加工データや，場合によっては第一次な地理情報までも，人や，組織に依存してしまうことになりかねない。外部フィーダーは便利であるが，依頼心が依頼心をますます強める，という弊害があることにこれまで以上に注意する必要がある。種は種屋に任せ，必要に応じて買ってくればよい，というのでは篤農家の名が泣く。地域情報収集および精粗／真偽判定能力は分析能力と同等，もしくはそれ以上に重要であると同時に，これまで以上に，地理学徒としての品質証明とアイデンテイテイーの拠り所となるであろう。

III．比較動態地誌のシナリオをかくために

本邦の本格的な地誌学研究の組織的編纂は山崎直方・佐藤伝蔵『大日本地誌』全10巻をもってその嚆矢とする。しかし，本格的な地誌学研究は1960年代に入ってからのことである[13)]。そのメルクマールは日本地誌研究所の設立であった。その後，1963年には日本地誌研究所の第１回会議が開催されて以来，『日本地誌』シリーズ，全20巻が刊行れる運びとなったことは，日本の地誌学の研究・教育にとって大きな刺激となった。本叢書は科学的地誌学の確立を目指し，等質地域と機能地域との考え方を統合し，日本の地域区分を行ったところにその特徴がある。記載事項は大・中・小項目とも階層的に系統化されており，その順序にしたがって手際よく地誌的記載を行うという編集方針を堅持しつつ，最終的に地域区分に至るという方法をとる。このようなスタイルで日本地誌を完成しようとする意図において，方法論的に首尾一貫して徹底している。日本全域を腑観するこの種の地誌書は，おのずから膨大な数にのぼる既往の研究モノグラフに依拠し，これを一定の手順と手続きにしたがって集成していかざるを得ない。地誌書の執筆というものは，個人の才をはるかに超えており，ただひとりの力を以てしては，いかんともし難く，凡庸の者の能く成しうるところではない，という意味での自己限定に立脚しているともいえよう。逆に言えば，初めから個々の系統地理学の研究成果は地誌書を構成する素材として執筆されているわけではなく，事後的の地誌風に再編されたものである。それゆえに，次のようないくつかの弊害もまた顕著にみてとることができる。すなわち，

１）全体的に機械的網羅主義の通弊におちいり，地誌的叙述が平板に流れる傾向にある。

地域によって，その地域独自の性格がある。これを同一のアプローチで抽出しようとする結果，地誌的記載に精粗，深浅の差が生じてくのではないか。

2）研究の蓄積が地域によって異なるため，記載にむらが生じてくるのは避けられない。

3）地理的性格，歴史的背景，自然，人文という4つの大項目の内容が，ストーリーの展開の面で必ずしも相互に融合しているとはいえない。大項目のキャプションそれ自体も工夫の必要がある。

動的地誌学を目指すのであれば，通時的にも，共時的にも変化する地域像の画期をクロスセクション面で整合的に把握できるような工夫が必要となろう。そこから，その対象地域の地域構造を規定す支配的因子を抽出し，これを中心にしその他の地域構成要素を再配置したうえで，地誌叙述のストーリーを展開する。そして同じ様な地域構造を示す他の地域と相互に比較・比定することによって，地域変貌のメカニズムを検証していく。そのためには既往の研究を編集・再編するという作業に替えて，調査研究計画書を第一段階から新規にスタートさせる必要がある。既存の素材をアレンジして作り直すより，初めから，新規出直しでいったほうが早い。これはなにも既往の研究を軽視するということにはならない。

すべての地理学研究者の調査研究の最終の目的が，かならずしも比較動態地誌の完成にあるわけではもとよりないが，その意義と必要性については何人も否定しないであろう。地誌が学校教育の中に局限されてよいわけがないし，また始めから出来ぬものと決めてかかり，未踏破の処女峰のようにただ仰ぎ見るだけでは芸がなさ過ぎる。また，地誌学以外の種々のメデイアの成果を資料にしながら，これを地誌風にアレンジする手もないわけではない。しかし，これでは，筋金入りのルポライター，ドキュメンタリー作家，写真家，その他さまざまなライターが演出（プロデュース）した作品と比較しても迫真力と説得性にかけるし，それを受け止める人々の数においても，与えるインパクトにおいても比較にならない。なんとしても社会の需要に応ずる自前のダイナミックな地誌が継続して世に問われるべきなのである。

地誌学的研究は，芸術的境域に達する水準にあるものと，平板かつ機械論的な記載に終始するモノグラフにわかれ，その中間領域がない，といわれる。それにはそれだけの理由があってのことであろう。地理学という学問分野に固有の要因，たとえば，ユニヴァーサリズムとパテキュラリズム，人間・社会共同体と自然，歴史と現代など，時空間や地域構成要素の扱い，さらには文化制度，イデオロギー，歴史的慣性をどのような座標軸で分析するかとか，あるいは，地理学研究者のその時々の才能の分布様態にも関係してるかもしれない。一方には，真似のできない名人芸のような超越的な境地と，教科書風の無味乾燥

な地誌書が同時に併存している状況が悪いとばかりもいえない。地理学のみならず，他の隣接分野においてもよく見られる現象であるからである。
問題は，可能な限り地理学研究者独自の力で収集した最新の第一次的なプライマリーデータによって地誌を叙述する手順と方法が学会全体のパラダイムとして共有されていない，という点にある。

いたずらに名人芸を擬して，新奇を衒い，過去の研究水準を超えたつもりが，研究交流や文献博捜の結果，果たして，実は自分だけのひとりよがりであったと，後日知ることほど口惜しいことはない。身の程を知るべきであろう。教えるべきは教え，学ぶべきは敢えて，異を唱えず，黙々とこれに習熟する。これを忘れては伝統の継承も，パラダイム革新もないと知ることが肝要である。初心忘れるべからず，手習い初めは坂に車を押すが如し，といわれる。学問は少し油断をすれば，他家の説くところにはこれをぞんざいに取扱い，慢心して，己が後退りしていることにさえ気付かない。波うつ湖面にうつる身も，乱れているとはいえわが身である。湖面がゆれているか，おのれがゆれているか，ともどもゆれているか。

温故知新のおしえを従順に学びとりたいものである。

IV．ベーコンの4つのイドラ－蟻と蜘蛛と蜂

スコラ哲学に異を唱え，帰納法を基本とした科学的方法を確立したことからイギリス経験論の先駆者と称せれるようになったイギリスのフランシス・ベーコンは，『ノーヴム・オルガヌム』[14)]のなかで，何人も，何らかの偏見を，意識するにせよ，しないにせよ，引きずっているものであり，それゆえに，次の述べるような4つの幻影を払拭し，打破することから真理探究の第一歩を踏み出すことができる，と喝破している。すなわち；

種族の幻影；すべて人類に共通する人間本来の偏見，たとえば，自分の信条や嗜好に合うものは受け入れるが，それ以外のものは排除したがるという傾向。自然をあるがままに観察することから分析を始める代わりに，心の先入観がまず先にあり，それによって自然の解釈を歪めてしまう

劇場の幻影；この場合の劇場とは階段式講堂の意。高名で，権威のあるある教派の教説をうのみにする傾向。すなわち，ソフィストのように機知の閃きだけによって，十分検証しないまま理論もどきものに仕立て上げてしまう手合い。たとえばアリストテレスやその後継たるスコラ哲学者の流れを汲む講壇派エピゴーネンたちを揶揄している。

洞穴の幻影；ベーコンはプラトンの『国家論』のなかの洞窟を想定し，常に真理と自然の光を浴びて生きて行かねばならぬと考える。しかし，われわれは，育った環境や受けた教育によって，特有の思考傾向を持つに至る。そのために陥る偏見と陥弄。たとえば，金持ちの家に育ったものは貧乏人の心理が理解できない。

市場の幻影；人々との交流の中から生ずる偏見と誤謬から生ずる。言葉，名辞，名前は事物の存在の保証になるというような決めつけ，あるいは唯名的定義[15]から生ずる錯誤と混乱。

帰納的実証主義の旗手として経験と観察に基づく分析から現象や事物の本質を解明しようと試みたベーコンは，認識の誤謬や過誤の源は，人間の心の中にあると看做して，そのなかの4つの幻影をまず払い除け，そこから事実を作り話や架空から分離して，真性の世界像をうちたてようとした。

われわれ地理学徒にとって切実なのはつぎの一点である。蟻のように食べ物（データ）を集めて実験するだけでも不十分である。蜘蛛は，均整がとれていて，幾何学的にも完璧なかたちの巣をで自ら張り巡らしたことが，誇らしくてしかたがないが，自己の体内からから糸を分泌して巣を作るだけの蜘蛛のように独断で行動するだけである。これに対して，蜂を花から花をめぐり密を集め，花粉と混ぜて花蠟をつくる。研究はデータを収集するだけでなく，それを自らの力でで消化し，新たな物質を生みだす蜂のように，観察データを蓄積し，それを分析・総合する力が求められている。というわけである。ウイリーはこのようなベーコンの言説を，「科学者は自然自体から事実を集める仕事を自分ではじめるまでは，進歩することはできない」と敷衍している[16]。

V．プロトコル命題

われわれは蜜蜂のような行動範型への絶えざる回帰を求められている。そのような地理学研究者像の祖型として，プロト・ヒューマンに対比させて，ここでは差し当たり，プロト・ジオグラファーとしておこう。彼の専門家としての《アカデミック　エートス(academic etos)》たる行動規範はおおよそ，つぎのようなコードからなっている。

1　帰納的経験主義：解釈や説明より観察が先行するということ。

2　プロトコル命題の遵守：観察を命題の形で定式化し，主観的解釈を交えないで仮説／法則を検証する。そのための準拠枠組と用語法があらかじめ定められており，しかも常に大きな革新的知見があれば，書換えられうるという状況のもとに，精査と

追試に耐えられるだけの反証可能性（refutabititiy, falsifiabitlity）の回路をつねにあけておくこと。

3　彼の調査研究は，いかに精密な地域区分を行ない，そこから対象となる地域の地域的性格を抽出することに成功したか，それが結果としていかに「地域理論」の精緻化に貢献したかによって知られる[17]。

4　彼は真性の地誌学的研究というものが，いわば，科学と芸術の間，すなわち自由7科（artes liberales）のなかにあり，しかも，その水準に到達しているならば，社会に大きく受け入れられところとなろう，といういみで，地誌の社会的効用[18]を十分知悉していること。（第1回）

5　最後にのぞむらくは，望蜀の感もあるが，かれが「人間は万物の尺度である」（プロタゴラス）という意味での人文主義者であること。

第3点のプロトコル命題については，学会の内外に対して地域区分地域理論に関する成果を系統的に整理し，財産目録一覧（invetory list at a glance）として提示し，地理学入門者のみならず，さらに進んだ研究を行うための出発点となるよう，常に系統的に整備しておく必要がある[19]。しかし，現段階では静態的分類学の域にとどまっており，今後動態的視点から複雑系としての多様な地域を，複合分類，対応分類，多次元分類，共軛分類さらには系譜的な進化分類学[20]など，新しいタクソンを援用し，地域理論を再構築していく必要がある。これがいわば，地域理論の動学化への一つ道である。

また，土壌学，土壌地理学の分野ではデユショフールも進化系列と呼ばれる進化のという基本的生態過程とこれに対する別の過程の重複の仕方，すなわち，一般的生物気候因子と局地的生態因子の作用の過程に生起する動的平衡状態から土壌分類体系を系統的に捉えようと試みている。方法論的には，シュレーダーやゲラシーモフらの発想を継承しいるものの，2つの基本生成過程の相互作用から生じる移動均衡の裡に土壌の分布と層位分化を説明しようとする点は，われわれの目指す理論の動学化への方途を示唆するものとして興味深い[21]。

科学者共同体のエートスが，マートンの《CUDOS》型から，ザイマンのいうところの《PLACE》型のそれを指向しつつあると指摘されている今，われわれの研究の在り方を，これまで述べてきたアカデミック・エートスと，地理学固有のパラダイムとしてのフィールドワークの議論に加えて，今新たな視点からグールドによって提起された照準枠組み[22]を勘案しながら，比較動態地誌学の可能性を新たな座標系のうえで再検討してみる必要があるように思われる。

T. S. Kuhn
(1922～1996)
© The Economists

A. Buttimer
(1938～　)
© Routledge & Kegan Paul

artes liberales（アルテス・リベラレス）
学芸7科

- trivium*（文芸3科）
  logica, grammatica, rhetorica
- quadrivium**（科学4科）
  astronomia, arithmetica, geometrica[注12], musica

第1図

* [ter-Via]
a place where three roads meet

** [quattuor-Via]
a place where four ways meet, a cross-way (roads)

典拠：A Latin Dictionary, Oxford Univ.　Press

幸いなことに，近時，正確で，最新の内容を盛り込んだ地誌や，それらの元になったプライマリデータ（ソース）への社会的需要も次第に高まり，情報化時代を先取りして，今後一層，旺盛となることが期待され，しかもその加工処理によって生ずるソースの多元的利用の可能性は，ほとんど無尽蔵であるといってもよい。そこから地理学の起死回生への道がおのずから開けてくるであろう。

それらの雛型は，F. マーチンが編集の任にあたり，1864年に創刊されて以来，1990年以降，B. ハンターが継承し，現在に至るまで絶えず内容を uo date してきたステーツマン・イヤーブックの例を見ることができよう。マクラミン社は英国人一流の consistency と tenacity をもって内容の補訂・増補を130年以上にわたっておこなうなど，徹底してその規矩を貫き通した。もって範とすべきであろう。まことに，継続は，その本来の意味において，力である。

信頼するにたる座右の地理便覧の一書としてふさわしいものは本冊にとどまらない。グローバルレヴェルでの地誌としては，最近，イタリア語版を底本とする World Geographical Encyclopedia (McGraw-Hill, 1994) 全5巻および Encyclopedia of World Geogra-

phy (Andromeda Oxford, 1994, 日本語版，朝倉書店）全24巻シリーズが公刊された。質量共にバランスのとれた本格的な地誌書として世評も高い。また，1992年には，地域研究に従事する研究者が協力して『世界の国ぐに大百科』（ぎょうせい）全３巻が公刊された。そのいずれも，地理学者や，地域研究遺影たちがフィールドの第一線から，変貌してやまない地域の実像を生き生きと報告しているという点で，従来の類書と一線を画す。すなわち，自然環境の取扱いに精粗の差こそあれ，地域像を比較地域学的な視点から，いかに正確にして，綿密かつ生き生きと描くか，というところを指向しているように思われる。それは地域のテクノロジー（編年史）としても読むことができる，という意味において，素朴な歴史ロマン主義の弊害を排し，より精密な《地理的時代像》を彫琢することにも役立つであろう。時空間を座標軸にして，そこに，文化／文明の担い手である人間と環境のかかわりを投影させながら，バランスよく描くことは至難の業であるが，不可能ではない。地平はわれわれが思うほど遠くにあるのではなく，思い込みと，ペシミズムが事の成就を妨げるのではあるまいか。

Thomas Kuhn 1996年６月20日　瞑目　享年73歳 —— の日に

注および文献

1）メソ・スケールでの調査は，メンバーにとって「協業による分業」意識と，役割意識を共有しやすくするための好条件となる。また，さらに，メソ～ミクロ・レヴェルになってくると，同一の調査地点で作業していても，自然，人文という区分ないしは，それよりさらに細分化された系統地理学的な発想よりも，問題領域の設定したがって解決レヴェル，解決のための working hypothesis の仮説に注意を集中せざるをえなくなるため，あるいはまた，そうしたほうが地域の全体像を把握しやすくなるので，おのずから地誌志向的，学際志向的となる。現地での定時ミーティング，ディスカッションがそのためにきわめて有効である。現地調査スタッフを含めた共同研究には，無駄，無理，摩擦も多いが，違いが目立つだけに，限られた予算と期間で何ができるかを痛感するため，おのずと求心力が働き，このようなトランスデシプリナリー志向が強まることがある。

2）いわゆる Abduction がこれに相当する。現地での使い勝手を考えて，よりオペレーショナルな形にするため，小さな命題群ごとに定義と参照マークを決めて，一定の様式にフォーマット化しておくとよい。このような作業に着手するために，これに先行して，対象地域を含むメソ・レヴェルでの地域で概査レコネイサンスが行われる。

3）米田　巖（1984）：海外地域研究とフィールドワークの思想．人文地理，第36巻第２号，pp. 35-55.

4）米田　巖（1987）：海外地域研究の方法・技術．藤原健蔵・村上　誠・中山修一．米田　巖編：海外地域研究の理論と方法．広島大学総合地誌研究資料センター，総合地誌研究叢書17，pp. 67-91.

5）諸外国と本邦の共時的，通時的研究を含む。

6）利用可能な研究資金の性格によって，研究期間，研究に動員できる研究者の数もおのずから制約を受けるが，より客観的な研究を継続して同一メンバーが調査に従事することがのぞましい。ただし，世代交代を念頭において順次若い研究者を計画的に正規の調査隊に繰り込み，集中トレーニングを施し，養成することも長期的な視点から考慮される必要がある。また，正確なデータ収集・観察のためには調査

期間には適当な長さが経験的に知られている。要は標本区の偏りをなくし，測点をできるだけ多く設定して，定点観測を継続するためには，おのずと長期にわたる現地滞在が必要になってくる，という点において短期より長期研究にメリットがある。

7）いわゆる abduction を援用する方式である。仮説探索というのは，初めから既定の概念図式やモデル群を適用することを想定せず，調査の初期段階において，どのような仮説が可能なのか，現地サイドの実情を加味しながら行なうメソ・スケールでの調査ーリコネイサンス (reconnaissance) が重要となる。この探索過程において現地インフォーマントとのラポールを深め，本調査に必要なworking hypothesis が決定される。この作業は，標本区設定，あるいは差し替え・変更のために不可欠な概査となる。そのような意味で，本調査に直接影響するため，ゆるがせにはできない。

8）この点については，ヴィダリアンを中心としたフランス地理学史に関する評価を巡る野沢の興味深い考察を参照。野沢秀樹（1996）：『フランス地理学の群像』地人書房，322p.

9）たとえば，広島大学総合科学部では，学部創設以来，ほぼ，四半世紀にわたり，大講座制のもとに，広義での地域研究を行ってきたが，初期の目的を達したとは到底いえない状況にある。これまで，学術的研究の意義と重要性がしきりに説かれ，これを志向するあまり，小講座制の弊害ばかりが声高に指摘され，数多くの組織改革が試行されてきた，実効があがっていない。大講座制の弊害はこれに劣らず大きいものがある。これからの地理学・地誌学研究を強固な基礎の上に確立し，これを本格的に展開していくためには，慎重に組織制度の整備・管理運営を進めていく必要があるように思われる。

10）この場合，地理学科出身者とか，地理学教室に属しているとか，あるいは，地理学の学界に所属して地理学の雑誌に投稿したことによって制度上，成員資格を自動的に取得し，また外形的には，「地理学研究者」として「地理学的」論文という推定を受けるにいたる，という文脈で理解されたい。ここでは，by birth and decent というより birth is much, but breeding is more の意味を特に強調しており，自分の思想と自己規律そして指向性の面で，はっきりと would-be(s)! とは峻別しうる。

11）現地でのインタヴューや面接調査を機械的に行っただけの，あるいは，お役所を始め，各種機関のトップや関係者を煩わしては，出来合いの資料を持ち帰り，それをもとに，パッチワーキングにつとめ，既成の理論で味付けするといった類の現地調査！を一再ならず，見聞した。しかし公刊されてより後の学問的価値が高く評価されている例を筆者は寡聞にして知らない。市場は，ものであふれかえっているが，淘汰の手は，手厳しく迫ってくる。

12）同学派に属する J. グラントはロンドン市の約80年にわたる死亡表を収集検討し，人口現象の生起に関する法則を発見し，今日の人口地理学，人口分析の基礎を築いたことや，W. ペティー自身がドイツ国状記述学（近代記述統計学）の発展系譜と相並び，経済学者として，政治算術という名のブリテン諸島の動態地誌を初めて著したことは意外と知られていない。政治算術学派の潮流が大陸の地誌学や国情（状）記述学と交差せず，政治経済学として英国古典派を形成していったのは，ちょうどジオメトリーが測量学からそれを基礎にした地理学／地誌学への未知をたどらず，幾何学として集成され，数学の分野に包摂され，独自の発展を遂げた経路と軌を一にする。われわれはここに，コスモロギア，すなわち世界知への探求を究極目的とする地誌学の発展にとり，科学の分化によってうしなったものの大きさを思い知る。アリスメティクとジオメトリは，その本来の対象と目的，探求の精神において地誌学の母なのである。

13）日本における地誌学研究と教育に関する歴史的変遷の総括と評価については，中山の報告に詳しい。中山修一（1989）：わが国における用語「地誌」の変遷，地誌研年報第1巻，pp. 101-115.

14）ベーコン著，柱　寿一訳(1978)：『ノヴ・オルガヌム』岩波書店，253p.

15）概念を定義する場合，概念の内包を十分明らかにしないで，別の言い方に変えたにすぎないような定義をさす。

16）バジル・ウイリー著，樋口・佐藤訳：『イギリス精神の源流』，140p.

17）フィールドワークは地理学の独占するところではない。フィールドサイエンスに属する隣接科学においてもこれまで広く行われてきた。相違点は，地理学が，ヘーゲル流に表現するならば，即自，対自，即自かつ対自，それらの3つのいずれの段階においても実態としての地域と，そこから導出された地域概念が，それ自体固有の本質的問題として対象化されているところにある。従ってそこから逸脱した研

究は地理学的ではないということになる。問題はこれを大前提としたうえで，いかにグランドセオリーに貢献するかである。

18) J. サイマン著，村上・川崎・三宅訳（1995）：『しばられたプロメテウス』シュプリンガー・フェアラーク東京 pp. 235-240を参照

19) たとえば，このことを明確に意識し，パラダイム整理と体系化を試みたものとして，西川　治（1985）：『人文地理学入門』東京大学出版会，244p. がある。

20) 系統分類学の分野で地理学にたいして示唆に富む研究としては，さしあたり次に掲げる文献を参照。
中尾佐助（1990）：『分類の発送』朝日新聞社，331p.
馬渡峻輔（1994）：『動物分類学の論理』東京大学出版会，233p.

21) デュショフール著，永塚・小野訳（1986）：『世界土壌生態図鑑』古今書院，388p.

22) グールド（1994）は，ユルゲン・ハバーマスの言説を引用して，科学的探求という行為そのものを，研究主題の選択・対象化する際の枠組の問題，そして，データ収拾からはじまり，定義，概念，方法論に至るまで，「意味」の選択を継起的におこなうこと，そのようなプロセスの連続ととらえ，選択の結果，ある特定の意味構造を帯びるようになると，知の落とし穴，罠に陥る，とする。意識する，しないにかかわらず，自縄自縛的な誤謬に不可避的に陥る危険を3つの視角から指摘した。すなわち，定義式，モデル構築，方法論など選択を技術的視角から吟味し，その結果，創造されたテキストに意味を与え，解釈していくプロセスを再考しようする解釈学的視角，そして，最後に解放的視角を提起する。彼は，アンバッテマーの主張に共鳴しつつ，これを第3の解放的視角に関説させ，研究者の「探索」という行為自体を検討する「自省的関心」の意義に着目している。
P. グールド著，矢野・立岡・水野訳（1994）：『現代地理学のフロンティア(下)』，地人書房，pp. 197-201.